

旅における歓待の精神

高橋 康雄

◎オデュッセウスにみる歓待の精神

神話の基本に「離脱（旅立ち） イニシエーション（試練） 帰還」という図式を示すのはキャンベルである（『千の顔を持つ英雄』上）。人間、悪いことはかりではないとよく言われるが、耐えることを知っていればたいていの不幸に我慢できるということを示唆する。禍福はあざなえる縄のごとし、という諺もあるように幸と不幸はバランスがとれていることを示す。執着したり、欲はったりするからバランスが崩れるのである。

そんな様子が物語に克明に描かれているとは思ってもみないものだが、ギリシア神話のオデュッセウスの冒険譚には旅における試練と歓待がみごとに語られているの

に気付く。

ギリシア中の英雄がトロイに集結して始まったトロイア戦争は十年の長きにわたった。そんな英雄の一人オデュッセウスはトロイアに行ったら二十年は戻らないだろうと予言された。

十年にわたるトロイの攻略を終えていよいよ帰国の途につくオデュッセウス一行。十二隻の船隊を組んで出航するのだが、トラキアの港イスマロスを襲って財産を略奪し、市民の女たちをさらう、のっけからの不始末。これでゼウスの怒りを買ひ、大嵐に翻弄される仕打ちを受ける。舵取り不能となった船で九日間も玩ばれたあげくロータスの国、浮世のことを一切忘れてしまつ、忘却」という名の幻覚剤の国にたどり着く。そこには人の子一人見当たらず、生えているのはロータスという植物

ただであった。

船員たちはロータスにむしゃぶりついた。つぎからつぎへと食べつづけるばかり。故郷をも忘れてしまったようだ。オデュッセウスは苦々しく思い、快楽にふける部下をわしづかみにして船に連れ戻して再び船出をする。

この逸話はおそらく旅に出るもの、冒険するものたちが何度も聞かされてきた物語であるからこそ冒頭に記されているのであろう。オデュッセウスには故郷のイタケ島への帰還の目的が達成されて初めて旅が完成するという意識があるが、他の兵士たちは当座の逸楽に目がくらんでいる。ロータスときにたぶらかされては幻覚にとどまることを示唆しているのだ。ロータス・イーターという言葉が何もせず、心配ことを避け、義務を怠ることとして今も残っているのはこの物語に由来するのである。互換性のない、一方通行の逸楽は、心配ことを避ける行為であり、この類の快楽は耽溺にほかならず、そこそこに切り上げてこそ旅を終了したときにしじみと回想できるものであると自覚すべきなのだろう。旅のセオリーを教えている箇所でもあるようだ。

オデュッセウスの裁量で一行は幸いにしてつぎなる旅

に出る。

つぎのキュクロプス族の島に上陸するのだが、ここもまたつらやましいほど肥沃な土地にめぐまれ、豊かな牧草を食む毛のふさふさした羊や山羊が群れをなしていた。あいにく留守らしい洞穴に一行は待機するが、やがて帰ってきたのはポセイドンの息子ポリュペモス。この巨人、何を思ったか、やにわに船員の二人をつまみあげてばりばりと食ってしまった。

出口をふさがれたオデュッセウスは一計を案じて脱出に成功するが、父なる海神ポセイドンに必死に祈るポリュペモス。オデュッセウス一行に災いが起こることを祈ったのである。

風の神アイオロスの風につて意気揚々と航海をする十二隻の大きな船。と思ったとたんになぎに出くわし、ようやく島に着陸するのだが、そこは人食いのライストリュゴン人が住むところで、十一隻の船を沈めてしまっ手荒いもてなし。オデュッセウスらは太刀打ちできない敵を逃れて、相変わらず荒れまくる海をかくくってアエアエ島にたどり着く。

まる二日というもの波打ち際に瀕死のからだを横たえ

るばかりの一行。三日目にオデュッセウスが立ち上がり、島を探索し、森の人家から煙がのぼるのを発見した。これ以上、部下を失うわけにいかないオデュッセウスは二班に分けて行動する。くじの結果、オデュッセウスの班は残り、エウリュロコスが指揮をとる班がまず出発する。オデュッセウスが見たという人家を直指すエウリュロコス先発隊、人家にたどり着くが、狼や獅子が家を囲んでいた。吠える様子がないので近づいてみると、危害を加えるどころか、家の中から女の美声が聞こえた。

船員たちが女の気を引くと、女は「あら、水夫さんたちがお揃いで。ちょうど食事をしようとしていたところですよ。歓迎いたしますわ」と優しく迎え入れた。

難破してひもじい思いをしていた船員たちはこれ幸いとばかり招きに応じた。

指揮官のエウリュロコスは「おまえたち騙されるんじゃないぞ」と警告し、自分はオデュッセウスの命令を守り、外に残った。

なかなか戻ってこない仲間を案じるエウリュロコスの耳ににわかにつながるさく聞こえたのは豚の鳴く声。部屋には人っ子一人いないではないか。あわてた指揮官は待機

するオデュッセウスのところに報告する。

オデュッセウスは一大事と館へ向かった。道中、若者に変装したヘルメスに声をかけられた。その怪しい女というは美声の持ち主でキルケという女魔法使いだという。仲間は故郷を忘れさせる薬をませた食べ物を供応されてしまったのだらうという。ヘルメスにキルケ対決の策を授けられたオデュッセウスは魔法除けの薬草を買って敵陣に乗り込んだ。

キルケは部下思いのオデュッセウスに免じて仲間を豚から元の人間に戻してくれた。そのかわりキルケの言い分を聞かなければならなくなり、しばらく館にとどまるよう口説かれる。優美なもてなしぶりにオデュッセウスもすっかり甘え、一年間にも及ぶのだった。

享楽に没頭するのはいいが、さすがに部下たちも里心がついたらしく、オデュッセウスに帰国の帆をあげることをうながした。オデュッセウスはキルケの膝元にすがって解放を訴えた。すると、条件があるという。ハデスとペルセポネの支配する冥界へ行って盲目のテーバイの予言者アイレシアスの亡霊に会って未来のことを聞いてこいという。

一難去つてまた一難 後悔をするオデュッセウスだが、勇気をふるつて船旅に出た。やがて太陽の光の射さない死の国にたどり着き、テイレシアスの予言に耳を傾ける。故郷の館はならずものたちのしたい放題で、妻に求婚するものたちが押し寄せるなど大変な事態になっていることを教えられる。ポセイドンの呪いもまだ続いているという。予言者はその秘策を授けてくれた。

再びキルケのところに戻り指示を受けて出発した。まだまだ難所が待っている船旅であることを知らされ、怪物セイレンの住む難所では仲間を失つ羽目になる。キルケに教えられたオデュッセウスの父親である太陽神アポロンの鳥トリナキエを通りかかった。そこは上陸まかりならぬと予言者に戒められていた。あいにく海も大荒れなので、部下たちも疲労困憊しているのだから夜のうちにだけでも休ませたいというエウリュロコス。仕方なく妥協したオデュッセウスは牛にだけは手をかけるなど厳命する。ところが、思わず眠ってしまったオデュッセウスの鼻先に匂ってきたのは牛を焼く匂いであった。七日目に風がおさまり、再び船に乗ったが、沖へ出たか出ないうちに叩きのめされ、残ったのは最後の一人、オデュッ

セウスのみであった。

船の残骸にすがつて生き延びたオデュッセウスはオギギアの島に打ち上げられ、そのニンフのカリュプソに助けられ、彼女と七年間も過ごすことになる。

そこに神々の使者として現れたヘルメスがオデュッセウスに帰還の命令を伝えた。カリュプソの必死の引き止めをふりきってオデュッセウスは筏を作るのだった。

ところが、海神ポセイドンは神の命令を知らなかったため、またもやオデュッセウスへの恨みを晴らすべく大嵐を起こす始末。またしてもオデュッセウスはパイアケス人の住むスケリア島の砂浜に叩きつけられた。

ここでオデュッセウスはアルキノオス王の娘ナウシカに助けられる。このとき神の加護の厚くなったオデュッセウスには影に添つようにアテナが守護神としてついていた。

王宮に招かれたオデュッセウスは客人として大切に待遇を受けた。オデュッセウスに不死の神を感じた王は娘を妻にしてくれることを神々が許してくれたら宮殿も土地も譲りたいと申し出るが、オデュッセウスは最後の帰還を果たさなければならぬことを切々と訴えた。

王はオデュッセウスの念願に協力するといひ、選りすぐりの若者五十二人を随行させることにしてくれた。

そして王は船出の前の晩餐会を催してくれた。このときまで王も誰もオデュッセウスの名前を知らない。宴の席ではトロイア戦争の英雄を讃える歌をつたつものやオデュッセウスにまつわる恥ずかしい事実まで精確に歌うのに驚く当の本人。オデュッセウスは知らぬふりしてトロイの木馬の物語やオデュッセウスの武勇伝を所望した。

客人に対する最大のもてなしがうかがえる光景である。

しかし、これでハッピーエンドとなるわけではないのがギリシア神話。二十年ぶりに戻った故郷のイタケ島にはまたしても最後の試練が待っている。妻ペネロペは主君の不在をいいことに言い寄る男どもに求婚され、返事を延ばしに延ばして、夫の帰還をひたすら信じて疑われない。館は無頼な食客に占拠され、風紀も乱れてしまっていた。

そんなところにオデュッセウスが帰還したのだが、アテナのお告げでみすばらしい乞食に身をやつして忠実な

豚飼い頭エウマイオスのところに行き、館へと導かれる。ギリシアには神は乞食の姿をして人びとのまえに現れ、その徳を試すという考えがあった。

ペネロペは乞食姿の男が夫とは露知らず、手厚く迎えた。宿主を食いものにするだけの無頼な男よりましに思えたのである。ペネロペに安穩を約束しない食客は関係性のリズムを崩すだけのやからであり、ほとほと手を焼いていたのだ。

時至れりと決断した王妃はおもむるにオデュッセウスが使っていた弓を持ち出して、この弓を引いたものを夫に迎えると言告した。乞食に変身したオデュッセウスなど眼中になかったのだが、弓を持つと凛々しく変身、誰もかなうものはなかった。オデュッセウスは不埒者たちを片付け、ようやくイタケの島はもとの平和を取り戻すのであった。

●スサノオの蓑笠姿

日本の神話上の英雄は蓑笠姿に身をやつして旅をする。つまりスサノオが青草を結いて笠蓑として衆神に宿

を乞う話が、『日本書記』(巻第一)に出てくるとおりである。ところが、衆神は泊めることを拒んだ。そのためスサノオは激しい風雨のなかを休息もせず、苦しみつつ降った。その後、世間では他人の屋内に蓑笠を着けて立ち入ること、および束草を負つて他人の家に入ることを忌み、これを犯すものがあれば必ず抜いを科することになった。

一夜の宿を乞えば拒むものと、受け入れるものがある。『風土記』には「一例争げることができぬ。常陸風土記」には祖の神尊が御子神たちのところを巡っていると、富士の岳に着くと曰が暮れてしまい、そこで一夜の宿をとらなければならなくなったのだが、富士の神は物譚中なのでと拒絶する。こんどは筑波の岳に登って一夜の宿を乞つと、筑波の神は丁重に受けて奉仕した。以来、富士にはいつも雪が降って人びとが登ることができず、筑波は東の峰から登ると実に楽しく遊ぶことができるのである。

同じく『風土記』の中の「風土記逸文」の「備後国編に「蘇民将来」という兄弟の話が入っているが、一夜の宿を断つた場合とちゃんと供心した場合との相違を述

べている。一夜の宿を与えるばかりでなく、丁重にもてなしを施した貧しいほうの将来は茅の輪を与えられ、疫病が流行ったときに難を免れるという特典を得、厄介払いした富める将来のほうは絶滅させられる。このときの客人はスサノオである。京都の祇園の由来譚にもなっている逸話である。

秋田男鹿半島のナマハゲの風習は笠蓑を想定している。ナマハゲに丸餅を戴く。それはトシタマの一種、新しい年のタマ(魂)を獲得することにつながる。礼節ある客人接待は再生の儀式として欠かせなかつたのである。したがって来訪神への歓待の精神は招福の神への奉仕という含みもある。

やがてそれは神々への歓待から異人歓待へと脈絡を持ち、旅びとを迎える精神を構築していく。もちろん、異人殺しの装置がひとつ加わる場合もあった。

客人として手厚い歓待を受けることには資格がある。アルキノオス王がオデュッセウスに最大のもてなしをしたうえ、民族会議に計って同意を得て船員を同行させるという協力力でしたのは、オデュッセウスがすでにそれに値する試練を克服して内面的な輝きを獲得していたこ

とによる。

ホスピタル（病院）と同じ語源のホスピタリティ（歓待・手厚いもてなし）はラテン語の *hostis* や *hospes* につながる。

オデュッセウスの受けた歓待（ホステイス）は単なる厚意に結びついただけのものだったのだろうかという疑問がわく。人品いやしからぬといえども見ず知らずの人物であるオデュッセウスが、なぜこれほどの客人歓待を受けたのだろうか。

エミール・バンヴェニストの『インド＝ヨーロッパ諸制度語彙集』によると *hostis* には「互酬関係にある者」の意味があり、ホメロスの描いた当時の社会にあった契約 というものには「一方が牡牛九頭分の価値しか与えていないのに、他方は百頭分の価値を返さなければならぬと感じるのだ」（同書、七章）という消息があったのである。すなわちオデュッセウスへの饗宴のもてなしや船員の提供は、神々の秩序のもとでの信頼関係として成り立っていたから見ず知らずの相手でも構わなかったわけが理解できる。

ちなみにホストの変化語にホステイリティーあるいは

ホスタイルという語があるが、「敵対」あるいは「敵意ある」という名詞と形容詞である。オデュッセウスに対する海神ポセイドンはある事件を契機に敵対関係になっていった。家来たちが友情を害する行為をした当然の報いなのだ。そのポセイドンを祀るナウシカの父の宮殿では最大級のもてなしをオデュッセウスは受ける。相手に損失をたらさないかぎり、懇意な関係ではなくてもこの時代特有の契約関係があったと思われるのである。

日本には「一宿一飯の恩義」という言葉が残っているが、ここにもささやかながら古代ギリシアに通じる旅の原点を顧みることができる。

オデュッセウスの場合もナウシカの父アルキノオス王の歓待のあと、きつと有効な盟友関係を保つたにちがいない、と勝手に想像してみる。

（メディア論・児童文化論／文化学部教授）